個人研究

中国における初期の「邑義」について（下）

――北魏における女性の集団造像――

佐藤智水

はじめに

漢代以降五世紀までの文物、遺跡を見てみると、そこに女性の名前はおろか、その時代に行なわれた事業に女性が積極的に関わった形跡を見ることはほとんどない。その点、南北朝期に入ると仏像を造って願いを祈る造像供養においては、ごく自然に女性の関与を感じ取ることができる。仏に思いを寄せその仏の像を作って自分の願いをかなえようとする行為、それらを通じて、女性が自己を表出するようになり、その結果、多くの女性の名前が刻みこまれ、後世から見ると仏教に触発された女性パワーの発信という社会的現象を惹き起こした。

中国において造像記にその名を刻まれた最初の女性は、金銅仏像では、北魏太平真君四年（四四三）の菀申造像記の末尾にみえる「清信士女劉文姜、菀景妻」であろう。[1] 菀申兄弟は高陽郡蠡吾県任丘村人（河北省中部）とみえる。また、造像の発願主として登場する最初の女性は、北魏興安二年（四五三）銘の鉅鹿郡下曲陽人（河北省中部）の「清信女趙路泉」であろう。[2] 二人とも清信女とあり、恐らくは寺院で三帰五戒の誓いを立て自らを仏教信徒と自覚していた女性と思われる。五世紀前半の河北地方において在家の女性信徒が少なからず存在していた証しである。石像では、同じく興安二年銘、成休祖造観世音像記で、その妻李蘭が最初の女性の名前であるが、[3] 女性の石像主としては皇興五年（四七一）の趙知法造像記がある。[4]

女性が造像供養に携わる場合、夫と共に夫婦として名を連ねている事例が多いが、当時の社会状況の中で、女性が単独で造像供養をしたり、また女性たちが集団を形成して共同事業を起こすことの困難さを思うとき、北魏時代に実際に出現した女性による集団造像はどのようにして可能となったか、この点について、史料を紹介しつつ若干の考察を加えたい。巻末に、「北魏における女性の集団造像」と題する表を掲載した。二重丸◎を付した造像記が、女性が主導したと窺えるものである。この表を見れば、女性による集団造像が始めは山西省、河南省、そして東は山東省、西は陝西省にまで徐々に広がっていくことを確認できよう。

本稿では、最初に先駆的な二つの作例（邑義信士女等造像記：白詡盧恭等造像記）を検討し、次に女性主導型と見られる◎印の四つの作例（王黄羅等造像碑：尹愛姜等造像記：張勝男等百六十餘人造像碑：劉愛女等法義兄弟姉妹造像記）を解析して、女性集団造像のあり方を地域史的環境のなかで考察しようとするものである。

一、邑義信士女五十四人造像記　北魏、太和七年（四八三）

この銘記は山西省北部に位置する雲岡石窟第十一洞東壁最上層に刻まれており、銘文については前稿を参照されたい。(5)

この銘記の冒頭に「太和七年歳在癸亥八月卅日。邑義信士女等五十四人…」とあり、これが中国最初の邑義史料と受け止められ、「邑義の信士女等」（邑義の清信士・清信女など）と読まれてきた。ただ、文章中の12行目に「又願義諸人…」とあり、17行目には「又願合邑諸人…」とあって、「義」と「邑」とは異なる概念として使われている。そうすると、「邑の義なる信士女等」とも「邑の義信なる士女等」とも読めそうである。この読みについては稿を改めて検討するが、いずれにしろ、男性と女性の仏教信徒が集団を形成し、協力して造像供養に関わったことは認めてよい。

この造像の第一の目的として、7行目以下に「為國興福、敬造石廟形像九十五區、及諸菩薩」とある。壁面の現状を見ると、最上段に菩薩立像を脇侍とする交脚菩薩龕、その下に一尊挙手坐仏の並龕、その下に二仏並坐龕、更にその下に文殊師利菩薩・大勢至菩薩・観世音菩薩の銘記をもつ三菩薩の破坐像（くずした形の坐相）があり、交脚菩薩龕から三菩薩まで縦に塔のように連なっており、その下に造像記の区画がある。この塔形龕の両脇の上〜中部に坐仏の千仏小龕がアパート状に配され、向かって右に四列11段の44体、向かって左に四列12段に45体と、整然と

並んでいる。銘記からすると、この構成を「石廟」と認識していたことになる。ところで、破坐の三菩薩像と脇侍を除く諸仏を単純に合わせると93体しかないが、現状では向かって右の中～下段に陥没個所があるので、そこに左と同様にもう一龕あったとし、且つ二仏並坐龕を二仏（二區）と数えれば九十五區となる。

次に、銘記には「邑義信士女等五十四人」とあるが、五十四人の名前は勿論のこと男女の内訳も記されていない。ところが、壁面の左右の千仏龕の下に多数の供養者浮彫りが見え、向かって左に、帽子を被りスカートを穿いて拱手している女性供養者が四段に36体、向かって右にズボンを穿き帽子を被った男性供養者が18体（うち1体は陥没部分）があり、合わせて54体を確認できる。そのほか大ぶりの僧形4体が、向かって右下に3体、左下に1体あって、供養者を先導している。これら僧形には邑師法秀・邑師曇秀・邑師道育・邑師普明の銘記がある。また、向かって左の下から4段目の女性供養者の先頭に、同じく小さな身の丈の僧形の人物が手に供物（花?）を持って立っている。この人物は尼僧かと思われる。供養者が漢族か胡族かという点は、後世の塗料による修復があって判断が難しいが、女性も帽子を被っていることからすると鮮卑系胡族の可能性がある。

以上、銘記と壁面の観察から、この集団は男性十八人、女性三十六人の合計五十四人の信徒が、四人の比丘僧と一人の尼僧に導かれて、造像供養を行なっていることが分かる。銘記の日付けが八月卅日というのは、六斎日に合わせたものと思われる。

この集団における女性の位置や役割は、銘記からは判然としない。ただ、四人の比丘が邑師として大きく刻まれ、一人の無名の比丘尼が小さく刻まれていることからすると、女性の役割を過大に評価することは難しく、男性の主導とみる方がよいであろう。とはいえ五十四人の三分の二が女性という集団構成はいかに理解すべきであろうか。夫婦が揃って集まった集団と考えるには男女の比率が著しくバランスを欠いている。

奉為（～の為に）以下には次のような祈願が刻まれている。

上為皇帝陛下、太皇太后、皇子。徳合乾坤、威踰轉輪、神被四天、國祚永康、十方歸伏、光揚三寶、億劫不隧。

奉為には孝文帝と文明太后馮氏、そして生まれて間もない皇子（恂）が挙げられており、このグループは文明太后と何らかの関わりがあったかもしれない。『魏書』孝文帝本紀七上には

（太和七年）閏月癸丑、皇子生、天下大赦。五月戊寅朔、幸武州山石窟仏寺。

とあって、閏四月五日に皇子が生まれて大赦令を発し、五月一日に孝文帝が雲岡石窟に行幸した記事がみえる。この頃の政治の主導権は文明太后が掌握しており、孝文帝行幸もほとんど文明太后と共に行なわれていた。「邑義信士女等五十四人造像」は行幸の三カ月後の八月末日に完成しているから、行幸当時の第十一洞東壁はふぞろいの小規模龕が彫造の最中であったと思われる。邑義信士女五十四人の集団は帝室の意向を充分に意識して、皇帝と太后の大徳を讃え、皇子の誕生を祝い、合わせて国祚の永康、仏法の興隆を祈願したものと思われる。

石松日奈子氏は、太和七年は雲岡石窟の開鑿を指導し教団を領導してきた沙門統曇曜が文明太后馮氏と対立し失脚した時期で、雲岡石窟造営史上大きな分岐点となった年とされる[6]。すなわち曇曜失脚の結果、造営中の帝室関係窟洞の計画が中断し、特に第十一～十三窟に顕著なように「国家と皇帝の特別窟から、一般の僧や民間の信者たちに開かれた大衆窟へと転換していった」とされ、その鍵となる龕として「邑義信士女等五十四人造像」が例示されている。筆者も沙門法秀の謀反事件（太和五年）の責任問題から、曇曜は太和六～七年に教団の統帥的権威を失ったと考えるものであるが、曇曜失脚説が認められるならば、「邑義信士女等五十四人造像」と文明太后との関係性はさらに近くなろう。この造像銘には女性たちの個別の名前は見えないけれど、文明太后が主導する北魏王朝のもとで、仏教信仰を介して女性の自己表出意識が高揚していくさまを感じ取れるように思う。

二、白詡・盧恭等造像記　北魏、太和十六年（四九二）

この造像記は、山西省太谷県陽邑郷の塔寺石窟に刻まれており、山西省では雲岡石窟に次いで古い紀年銘をもつ作例である。造形的には偏袒右肩の坐仏や二仏並坐・交脚像が見えるなど、雲岡の影響が見てとれる。塔寺石窟の造像や銘記は筆者前稿を参照[7]。

塔寺石窟は、山西省中部の山間地域において、漢族の白氏及びそれと姻戚関係を有するこの地の有力者たちが、白氏に協力して造営した小石窟であり、地方における邑義の萌芽的段階を示す遺跡である。太和十六年に北壁のA面が彫られ、続いてすぐに北壁B面、そして少し遅れて東壁・奥壁のLMN面が彫られたと思われる。この集団の性格については前稿で詳論したので、ここでは女性の参加について触れておく。

塔寺石窟北壁のA面の坐仏龕の下に、太和十六年銘の白詡や盧恭等による集団造像銘があるが、ここには女性の名は見られない。ところが、A面に引き続き彫られたと思われるB面の坐仏並坐龕の直下には、8人の供養者浮彫りがあり、向かって右に4人の男性供養者（先頭は大きな

人物）、向かって左には4人の女性供養者（先頭に子供）が並んでいて、それぞれ胡服をまとっている。この時期、この地域の庶人が婦人も胡服を着用していたことが分かる。その下に刻まれた供養者の人名はすべて漢族の名前で135人を数え、そのうち25人が女性である。例えば「清信士白宜妻楊香朱」「楊貳王婦冀明光」「張静母趙賢姿、女張祖」「清信士佛弟子盧岡妻相里阿母女」等である。彼女たちは母として、妻として、娘として登場する。そのこと自体は彼女たちの地位の向上を直ちに示すものではないが、集団の中に混じってその名を姓名共に記載された女性としては中国史上極初期の遺跡と言え[8]、その点は見逃してはならない注目すべき事実である。

塔寺石窟は、当時の実情通りに男性優位の地域社会の実態を反映しており、それだけに、「女性の名を刻む」という行為が他に先がけて進行していることは、地域社会の中で「女性の地位や役割に関する考え方」が徐々に変化していることを意味するであろう。そして、北壁より少し遅れて刻まれた東壁台座右側と想定するM面に「清信女郭□姬」なる女性が現れる。すなわち、この地域において清信女と自覚する女性が生まれているのであり、女性の地位に関わる社会環境の変化は、微々たるものとはいえ、奉仏事業を介して実現しているという点で、仏教的雰囲気と密接に関わっているとみてよいであろう。

三、王黄羅等百余人造像記【史料1】　北魏、太和末年

この造像碑（以下、王黄羅等碑と略称）は山西省東南部に位置する高平市邢村採集と伝えられ、現在山西博物院に展示されている。高さ一八二㎝、幅八三㎝、厚一八・五㎝の大型造像碑である。

碑陽は下部に本尊の龕が彫られている。尊像は偏袒右肩で禅定印の三尊坐仏。両脇を開け、透き通るような衣が細い胸回りを際立たせ、雲岡様式の影響を強く感じさせる作例である。脇侍菩薩は共に薄衣をまとって蓮華上に立ち、内側の手に棒状のものをもって高く掲げ、下にさげた外側の手は水瓶状の物をもつという珍しい形相をしている。正面のその他の部分は千仏で満たされている。即ち上段～中段そして下段の本尊龕の両脇まで、隈なく坐仏の小龕が並んでいる。王黄羅等碑には紀年銘も祈願文もないが、尊像の形相や文字から、太和年代の後期から末期にかけての作例と見られる。

碑陰は、全体の約三分の一に相当する上段に、正面と同様の千仏が彫られている。ただ最上段中央に小坐仏九体分に相当する大きさで、合掌

する一尊坐仏がこじんまりと位置している。そして中～下段には造像に関わった供養者の名前が百余人、七段、17行にわたって整然と刻まれている。その文字は素朴で骨太く、きわめて印象的である。最下段は若干空いていて、供養希望者がいれば追記できそうな空白となっている。

南北朝時代の女性の名前について、管見の限り先行研究はない。そもそも漢族の名前のつけ方には男女それぞれ一定の傾向はあっても、明確な区別はない。しかし、この造像碑の供養者の名前を整理すると、いくつかの特徴がうかがわれる。以下、分析を試みる。

(1) 背面には、約一〇四人の名が刻まれているが、九〇人は確実に女性と判断される。[9] すると残りは、男女不詳九人、欠損による不明五人である。男女不詳の九人とは、第一段の趙賜・浩那・閻農、第二段の趙定光、第三段の郭薛胡、第四段の李榮光・孟斉王、第六段の王歸生・申屠黄である。ただ、賜・農・光・王・歸・黄の字は、他の女性の名の一部としても見えるので、女性の可能性がかなりある。そうすると残りの二～三人の男性が百四人の女性集団の中に紛れていることになり、それは極めて不自然である。全員を女性と見てよいかと思われる。

(2) 都維那□□一人、□□□□□一人、維那九人が、肩書きのついた人物である。[10] そのうち王黄羅・司徒好・王阿容・魚公主・孟香嬰・畢都狃は確実に女性で、趙賜・浩那・閻農が男女不詳だが、既に述べたように賜・農は女性でも充分あり得る。ところで、この集団の代表者と想定される冒頭の都維那□□と次の□□□□□、そして第六段中ほどの□□□の部分は、よく見ると意図的に石工によって削られたと分かる。この剝脱部分がいつ如何なる理由で削られたのか、ここに刻まれていた人物は男性か女性か、現時点では手がかりがない。従って残された部分に基づいて、この集団は都維那一人（或は二人）、維那九人（或は十人）によって指導されていた、と捉えておく。

(3) 人名を姓氏で整理すると以下のようになる。

王	（20人）	維那2	孟	（2人）	維那1
畢	（8人）	維那1	魚	（2人）	維那1
浩	（7人）	維那1	閻	（2人）	維那1
郭	（7人）		邢	（2人）	
張	（6人）		陳	（2人）	
李	（5人）		韓	（2人）	
朱	（1人）				
孫	（1人）				
杜	（1人）				
董	（1人）				
彭	（1人）				
聊	（1人）				

趙　（4人）維那1　　秦　（1人）　　令孤（1人）
司徒（4人）維那1　　殷　（1人）　　呂　（1人）
申屠（4人）　　原　（1人）　　和　（1人）
牟　（4人）　　侯　（1人）
崔　（3人）　　皇甫（1人）

王氏は王黄羅以下二〇人を数えて最も多く、そのうち維那も二人いて、この造像碑建立の主導的役割を果たした一族であることが判る。参加者の多さから言えば、削られた個所には、王氏に加えて、維那のいない郭・張・李のいずれかが刻まれていた可能性がある。

以上、王黄羅等碑の供養者名から、ほとんどが女性の参加者と見られるとすれば、五世紀末の晋南（山西省の東南部）の片田舎で、高さ2mに近い石像を造営する造像供養が、女性だけでいかにして可能であったか、まことに不思議な作例と言わねばならない。

この造像碑が採集された地域は、現在は長治市から南に晋城市に抜ける途中に位置し、更に南に行けば鄭州市や洛陽に通じていて、古来から交通の要路にあった。漢代～晋代は上党郡内の南に位置する泫氏県で、北魏末期に高平県が置かれた。この地域の最初期の仏像としては、沁県に小さな太和石仏（無銘）があり、沁水県には太和十七年の紀年を有する小型の造像碑、また市内の羊頭山には麓から頂上にかけて太和年代以降の小窟や石像が散在している。いずれも雲岡様式の影響がみられ、五世紀の仏教遺跡文物の多く残る地域である。

王黄羅等碑と最も関連性があるのは、高平市建寧郷建南村の資積寺門前に現存する「李道興等邑子造像碑」（以下、李道興等碑と略称）であろう。この造像碑については前に拙稿で取り上げた[11]。

李道興等碑は高さ二五〇cm、幅一〇八cm、厚六八cmの堂々たる大型の四面造像碑で、四面共に仏龕と千仏が隈なく彫られている。碑陽では下部に偏袒右肩の涼州式着衣の三尊合手坐仏龕が彫り出され、その両脇に太字の銘記が刻まれていて、そのほかは碑陽全体に千仏が整然と浮彫りされている。碑陽下部の銘記は、向かって右に「大代太和廿年歳在丙子、邑子等、皇帝陛下、造石像一區」、向かって左に「建興太守李道興侍佛時」（北魏の建興郡は高平一帯を統括）とある。皇帝陛下の直前に「為」を入れるべきであるがそれは記されていない。この四面造像碑の左右の側面には、上部に千仏、下部に供養者銘があり、右側面には「都惟那郭僑」「都惟那畢廣」（惟那は維那の音通）という二人の世話役以下、

四十三人余りの肩書きのない供養者名、左側面にも肩書きのない三十二人余りの名が刻まれている。その集計は以下の如くである。

郭(48人)・畢(8)・陽(5)・司徒(2)・李(2)・秦(2)・閻(1)・申屠(1)・王(1)・楊(1)・宋(1)・羅(1)・陳(1)・鄧(1)

名はすべて男性で郭氏が断然多く、都維那の肩書や供養者の並び具合からすると、郭氏と畢氏がこの地域の有力者と見られる。彼らは建興郡太守の李道興を勧誘し、その協力のもとに造像事業を挙行している。李道興は渤海郡李氏という由緒を誇る出身で、一族は早くから仏教になじんでいたことは前稿で考察した。即ち、高平一帯の在地の有力者の郭氏・畢氏の呼びかけで郡太守の承認のもとに邑義が結成されている。

ところで、李道興等碑と王黄羅等碑とはいくつかの点で関連性がある。一つは、所在地に関して、李道興等碑は高平市の建寧郷建南村に現存し、王黄羅等碑は同じ高平市の邢村将来と伝える。両者の距離は直線にして約20キロ、意外に近い。二つに、尊像の形相は共に雲岡様式の影響を受けている。三つに、刻まれた文字の素朴な太字の筆法が類似している。四つに、供養者の姓に共通性が見られる。

以上から、王黄羅等碑と李道興等碑は極めて緊密な関係があったことが想定され、或は同一石匠グループによる作例の可能性もある。そこで、両方の供養者を細かに見てみよう。

まず違いから見ると、前者は女性供養者、後者は男性供養者である。次に共通点を見ると、双方の供養者に重なる姓が多い。王黄羅等碑の供養者をあらためて多い順にあげると次のごとくであるが、王氏が突出して多く、また姓にばらつきが目立つ。（傍線部は両者共通する姓）

王(20人)・畢(8)・郭(7)・浩(7)・張(6)・李(5)・申屠(4)・趙(4)・司徒(4)・窄(4)・崔(3)・孟(2)・魚(2)・閻(2)・邢(2)・韓(2)・陳(2)

秦・殷・原・侯・皇甫・朱・成公・孫・杜・董・彭・聊・令・呂・和（↑各1）

李道興等碑（再掲）は男性ばかりで、郭氏が圧倒的に多いが、姓のばらつきは少ない。

郭(48人)・畢(8)・陽(5)・司徒(2)・李(2)・秦(2)・申屠(1)・閻(1)・王(1)・陳(1)・楊(1)・宋(1)・鄧(1)・羅(1)

この両造像碑の供養参加者を見ていて、王黄羅等碑にこれだけ多様な姓があることは、参加した女性の多くが独身女性ではなく、既婚婦人であることを示している。また、都から遠い晋南の地で、まだ充分認知されているとは言いがたい造仏供養という事業に、唐突に女性たちだけで取り組めるとは到底思えない。最も合理的な理解は、この地域で仏教信仰に熱心な郭氏と畢氏を軸に、一つは男性の邑義、一つは女性中心の邑

義を形成して、それぞれが造像事業に取り組んだ、という解釈であろう。王黄羅等碑では維那二人を擁する王氏の女性が最も多いのに対し、李道興等碑では王氏が一人というのは、彼女たちが他所から高平の有力者に嫁いできたからという事情が考えられる。王黄羅自身は郭氏或は畢氏に嫁いだ女性である可能性が充分あるし、同様の例は浩・張・李・趙氏ほかにも言えよう。王黄羅等碑に紀年銘や祈願文が刻まれていないのも、二つの造像碑が造像供養としては一体であったからとすると納得できる。

即ち、王黄羅等碑は、郭氏及びそれと結束していた畢氏や陽氏・司徒氏などの当地の有力者に嫁いだ夫人たちを軸に、夫たちの支持を得て邑義集団を築き、造像供養に参加したのではないだろうか。以上のように見れば、王黄羅等造像碑は女性独自の発想と行動力で実現したものではないことになるが、その点を差引いても、女性が邑義の運営に維那として参画し、一定の役割を果たしたその積極性は充分認められるべきだと考える。

四、尹愛姜等造像記【史料2】北魏、景明三年（五〇二）

この造像は河南省の龍門石窟古陽洞南壁窟頂の奥壁寄りにあり、高さ63㎝、幅37㎝、深さ7㎝の龕の中に三尊交脚弥勒像が坐していて、龕の向かって右に三角状の題額をもつ碑形の造像銘記がある。碑形の大きさは高さ約50㎝、幅約20㎝。

銘記をみると、唯那（維那と音通）の尹愛姜ら二十一人が、景明三年六月廿三日に共同で造像供養を行なったことが記してあり、人名はすべて女性である。即ち、この銘記は女性のみの集団と確認でき、且つ造営年月の明確なものとしては中国最初の作例といえる。換言すれば、最も古い女性単独の邑義である。因に、廿三日は六斎日に当る。

彼女たちの邑義のあり方を、名前等の整理から探ってみよう。尹愛姜等造像記は文字の摩耗や窟壁の疵によって、判読困難な個所が多い。移録には以下の三点を参照した。京都大学東方文化研究所、水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』（座右宝刊行会、一九四一年）所載の「龍門石刻録録文」（略称「龍門録」）。劉景龍編著『古陽洞』（略称「古陽洞」。科学出版社、二〇〇一年）。毛遠明校注『漢魏六朝碑刻校注』第三巻（略称「毛遠明」。綫装書局、二〇〇八年）。これら三点は数か所で読みが異なるため、いくつかの拓本を見比べて、筆者自身が以下の如く校点を施した。

1　景明三年六月廿三日。□□□□□□□子、唯那
2　尹愛姜、唯那張雙□、□□□、□妙姿、王容、王午
3　好、楊醜姜、郭容、劉豊、王□、□轉好、王足趙、尹娥
4　容、鄭桃、胡歎郷、尹醜姜、尹醜女、程曇妙、尹顯姿、
5　尹陵姜等廿一人、各為七世父母、所生眷属、亡者生天、
6　生者福徳、□□石弥勒一區。普為終生、咸同此願。

娣女（題額）

5行目に「廿一人」とあるので、1行目に一人、2行目に六人、3行目七人、4行目六人、5行目一人、の二十一人となる。1行目の「□□□□□□子」については、「龍門録」No.587は「比丘尼蘇□子」とし、「古陽洞」No.2271は「□□□□□郭□子」とし、「毛遠明」No.0387はこの部分を「約闕七文字」として移録していない。「龍門録」のように「比丘尼」と読めれば集団の性格も分かりやすく、またその可能性は充分あるが、現時点で確実に比丘尼と読める拓本を知らない[12]。従って、ここは前記のように留保しておく。

2行目の「□、□□□、□」の部分について、「龍門録」「毛遠明」は共に「□□□□」として解読不可を四文字とし、「古陽洞」は解読不可を五文字とす。そのすぐ下の「妙姿」については、「龍門録」は「妙婆」、「毛遠明」は「妙安」、「古陽洞」は「妙姿」としている。筆者は拓本により「妙姿」とする。3行目は、「龍門録」は「好。揚醜。姜郭容。劉豊。王密。盛轉好。王足趙。尹娥」とし、「毛遠明」は「好、楊醜姜、郭容、劉豊、王寧□、□轉好、王是趙、尹娥」とする。「古陽洞」は「好楊醜姜郭容劉豊王□□轉好王足趙尹娥」としており、筆者は文字の読みは「古陽洞」に従いつつ、自らの句読点を施した。4行目は、「龍門録」は「容。鄭桃。胡歎郷。尹醜安。尹醜安。程曇妙。尹顕安。」とし、「毛遠明」は「容、鄭桃、胡歎郷、尹醜姜、尹醜宓、種□妙、尹顕姜、」とし、「古陽洞」は「容鄭桃胡歎郷尹醜姜尹醜女程□妙尹□海」としている。筆者は各種の拓本をもとに前記のようにした[13]。

二十一人の構成をみてみよう。1行目を別にして数えると、肩書きを有する人物は、唯那の尹愛姜と張雙□の二人である。姓をみると

尹（6人）、王（4）、張（1）・郭（1）・胡（1）・楊（1）・劉（1）・鄭（1）・程（1）、不明（3）

という異姓者の集団である。そしてもう一人1行目、そこには必ずや何か肩書きを持つ人物が刻まれていたと思われる。それを「龍門録」では「比丘尼蘇□子」とするが、蘇は異体字の「蘇」にも見え、また、つくりの部分の「おおざと」を根拠にすると、「郭」にも「鄭」にも似ている。その肩書きは今は完全に摩耗していて、「唯那比丘尼」なのか「□□都唯那」或は「□□□唯那」なのか、交脚像龕の周辺に供養者の浮彫りも見えず手がかりがない。ただ言えることは、二十人ばかりの女性たちが世話役としての「唯那（＝維那）」を擁して邑義を結成し、自らの規律と協力によって、龍門古陽洞の窟頂に造像供養を完遂した、という事実である。冒頭不明の人物が比丘尼とすると、女性たちはこの奉仏事業を尼僧の指導のもとに行ったことになる。指導した僧・尼僧の名が必ずしも造像銘に刻まれるわけではないので、取り分け女性のみの集団の場合、ここに比丘尼の刻字がなくとも指導する尼僧が存在したと見てよい。

ところで、この二十一人の女性たちはどのような繋がりで集団造像を完成しえたのであろうか。龍門石窟古陽洞の開窟当時においては、誰もが自由に費用を投じて造像供養が可能だったわけではない。当然ながら、古陽洞造営を創始した人物や有力な支援者等と何らかの関係を必要としたであろう。

古陽洞の開鑿は北魏孝文帝が南伐を中止する見返りに遷都計画を随従の臣下たちに承諾させ、首都洛陽城の建設計画を命じた太和十七年（四九三）十月一日の詔が契機となり[14]、比丘慧成とその賛同者によって国の為の造像供養が計画されたことに始まる。

古陽洞の造営を指導した比丘慧成の当初の設計プランは、西の奥壁に二十尺規模の本尊（像高約五ｍ）を彫り出し、十六尺程度の脇侍菩薩（像高約四ｍ）二体、そして左右の北壁・南壁にそれぞれ四大龕を並べ、その上に天井近くまで千仏を配置するものだったと思われる。ところが、旧都平城から移住した王侯・官人やその夫人たちから喫緊の要請を受けて、本尊と基本設計の四大龕の造営を継続しながら、それ以外の部分に大小さまざまな龕を彫り出すこととなった。その結果、門口付近の北壁中上段、南壁中上段、そして窟頂にかけて、ふぞろいの龕像が太和末年（四九五～四九九）から景明年間（五〇〇～五〇三）にかけて彫り込まれた。これらの龕像の大半は平城から移住した王族・官僚とその家族たちによるものとみてよい。

尹愛姜等造像は南壁天井で奥よりの窟頂に刻まれているが、この区画は「廣川王太妃侯氏」及び廣川王家に近しい人々の領域のように思われる。この領域の大きな龕は南壁千仏の右上隅を侵食して造られた「廣川王太妃侯氏為亡夫賀蘭汗造像」（交脚菩薩像）のほか、「廣川王太妃侯氏

為己身及孫息造像」（交脚菩薩像）があり、小龕は「国常侍臣王神秀造像」、「国学官令臣平乾虎造像」があり、[15]二つとも奉為に「為太妃廣川王、敬造釋迦牟尼像」と記している。国常侍も国学官令も諸王の側近に侍従する官で、北魏では下級の官位だが（それぞれ従八品、従九品に相当）、廣川王家とは格別の恩遇関係にあったことが窺われる。この廣川王関連の区画には、そのほか十余の中小の龕があるが、簡単な銘記や銘記の全くない龕が多い。[16]その中で、この域に王神秀造像や平乾虎造像よりも大きめの女性邑義の龕を彫るには、彼女たち自身か指導の僧尼、或は父や夫たちが太妃侯氏[17]や王家の侍従官と極めて近しい関係にあった可能性がある。女性だけで邑義を形成するに当っては、特に未婚の場合は父母、既婚者の場合は夫家や舅姑の認知と協力など彼女たちを取り巻く環境との調整は不可欠であったと思われる。それを少し探ってみよう。

尹愛姜など尹氏六人はその名前から姉妹か或は従姉妹のように想像され、古陽洞では、景明三年「孫秋生等造像記」（「古陽洞」No.2296）中に「尹文遠」、紀年銘のない「嚴雙珍・尹文和造像記」（同No.1901）、永平四年「尹伯成妻姜造像記」（同No.1874）などに尹氏が見えるが、廣川王家との直接的関係は確認できないものの、『魏書』では北魏王室との姻戚関係二例を見いだせる。[18]また、構成員に王容・王午・王足趙など王姓の女性が四人おり、国常侍の王神秀と同族かもしれない。

次に、彼女たちの身分と関わって碑形とその題額がある。「娣女」という題額は他に類例がなく南北朝を通じて唯一の事例である。そもそも題額は碑石の体裁として継承されていた様式で、造像記に用いる伝統はなかった。それが龍門古陽洞ではいくつか作例がある。

《始平公像一區》……太和廿二年「比丘慧成造像記」（「古陽洞」No.1842）
《娣　女》……景明三年「尹愛姜等廿一人造像記」（「古陽洞」No.2271）
《邑子像》……景明三年「孫秋生等二百人造像記」（「古陽洞」No.2296）
《弥勒佛像》……景明四年「比丘慧樂造像記」（「古陽洞」No.1850）
《邑子像》……景明四年「邑主馬振拜等造像記」（「古陽洞」No.2521）
《邑子像》……（景明）「邑主楊大眼造像記」（「古陽洞」No.2023）
《釋迦像》……（景明）「魏靈藏薛法紹造像記」（「古陽洞」No.2024）
《邑　像》[19]……（景明）「邑師惠□造像記」（「古陽洞」No.2282）

《邑子像》　……（景明）　「邑主魏桃樹造像記」　（「古陽洞」No. 2067）
《(空白)》　……太和十九年「丘穆陵亮夫人尉遲造像記」（「古陽洞」No. 1840）
《(空白)》　……太和廿二年「北海王元詳造像記」　（「古陽洞」No. 1843）
《(空白)》　……景明三年　「廣川王祖母太妃侯造像記」（「古陽洞」No. 2272）

以上見たところ、題額は古陽洞の中で初期の堂々たる造像記に集中しており、像主の身分が高いか或は邑義造像に顕著である。尹愛姜らの邑義が題額を持つことからすると、彼女たちの父や夫たちが身分として全くの庶人である可能性はほとんどない。題額の「娣」は男子の徳性である「悌」を女性に置きかえた表現と思われ、「娣女」は構成員が実の姉妹のように、信仰にもとづく仲むつまじい関係、即ち仏法を機縁とした〝義姉妹〟を期待しての表象と考えられよう。男性の「邑子像」に相当する女性の邑義造像にふさわしい題額の標記である。

次に、尹愛姜等造像記の内容を見てみると、初期邑義に特有の「為皇帝」や「為国」の句がないことに気づく。末尾に「普為終生、咸同此願」（終生＝衆生）とあって、僧尼の指導があったことが垣間見えるが、祈願も個々人の願いではなく、構成員全体に共通する願い、それも当時の人々が仏教信仰に寄せる最も標準的な「亡者生天、生者福徳」になっている。造像供養をするに当って、女性たちが素直に弥勒像を造って祈っており、特段に王朝や皇帝を気づかう必要のない身分環境にあったと言うこともできよう。

以上の考察によって、尹愛姜等造像は北魏王朝乃至王家に仕える父や夫を持つ婦女子が、恐らくは尼僧の指導のもとに集まって造像供養を行ったという理解で、さほど的はずれではなかろう。

ところで、尹愛姜等の龕像は窟の天井にあって、供養をする時は10m余り離れて仰ぎ見ることになる。蠟燭を灯してもあまり光が届かない時は、鏡を使って照らすなどしたのであろうか、造像完成の儀礼のあと、のちのちに供養者やその子孫がどのような関わり方をしたのか、その点の史料は極めて少なく今後の課題である。

五、張勝男等百六十餘人造像記【史料3】北魏、正光三年（五二二）

この石像（以下、張勝男等造像碑と略称）は、大型の四面造像碑で山東省淄博市臨淄区の斉国歴史博物館にあり、一九九九年に臨淄鎮の農家

から出土したという。筆者は二〇一一年三月五日に龍谷大学の長谷川岳史教授・市川良文准教授と三人で博物館を訪問し、許可を得て、寒風のなか調査に従事した[20]。我々が訪れた時、この張勝男等造像碑は館の南外庭の路面に横向きに仮置きされていた。そのため碑陽・碑陰と左側は熟視できたが、右側は見ることができなかった。造像碑は最下部が破損していて、現状では高さ184㎝、幅75㎝、底厚67㎝であるが、脱落した本尊の足先及び蓮華紋様の台座部分が側に残っており、それを足すと通高240㎝という大造像碑である。北魏の正光三年正月六日の銘があり、山東省の大型石像としては最初期の作例と言える[21]。碑陽は一尊挙手の如来立像であるが、足先と頭部が失われていて、尊顔を見ることはできない。銘記によれば本尊は釈迦像で、残高は88㎝、本来の高さは135㎝前後であったと思われる。碑陽には刻まれた文字はない。

碑陰は、上から三分の一程度の領域をさらに四段に分けて、小坐仏が一段に五体ずつ計二〇体並んでいる。その下の三分の一程度の領域に祈願文が15行、さらにその下の残り三分の一のスペースに供養者名が四段18行にわたって刻まれている。

碑の左側は、上下十二段に分けられ、段ごとにほぼ三体ずつ計三十六体の坐仏が彫り出され、龕の境界（畦道形の縦空間）の所々に、それぞれの坐仏に対応するように供養者による個別の銘が刻まれている。碑の右側は地面にほぼ接していて、わずかな隙間から覗くことしかできず、詳細な調査は次の機会を待つことにした。

碑陰の祈願文を見てみよう。銘記の日付けは、末尾に「大魏正光三年（五二二）正月六日」とあって、北魏の粛宗孝明帝の治世である。文意は、まず初めに釈尊がこの娑婆世界に出現された由来を説き起こす（1～4行）。次に、青州斉郡臨淄県の清信士女張勝男が百六十余人を率いて仏道に帰依し、資産の一部を割いて、師僧・父母・一切衆生の為に釈迦牟尼石像一体を奉造したことを記す（4～8行）。また次に、心を込めて造った尊像（仏）と供養者の誠心が響き合うことを願うとし（8～10行）、また次にはこの造像の功徳をもって、亡者は濁世の塵を洗い流して彼岸に託生し、仏に遇って正法を聞くことができますように、また現存する供養者及びその眷属はすべて、寿命が永く延びて身心共に安穏でありますように、と祈願し（10～13）、最後に一切の衆生がこの福徳にあずかりますように、という常套句で締めくくっている。

この祈願文についてまず確認すべきは、発願主が青州斉郡臨淄の清信士女（＝清信女）張勝男という女性であること、及び彼女が百六十余人を勧率して、師僧・父母・兄弟の為に釈迦像を本尊とする造像碑を造った点である。

臨淄県は、北魏の青州斉郡の郡治で、現在は淄博市域の臨淄区となっている。この発願主張勝男は清信士女（＝清信女）と自称しているので、

仏寺で三帰五戒等の在家の戒を受けた女性と思われる。女性の名前（勝男）にみえる〝男〟は男児をイメージするもので、勝男というのは「すぐれて元気な男児を産みますように」という期待と願いを込めて命名されたと思われる。[22] この祈願文によって、我々はこの四面の大造像碑が女性の発願と勧進によって造営されたことを確認することができる。

碑陰の下部を見ていこう。ここには六十一組の夫妻と一組の母子、そして単独名の男性二人、あわせて百二十六名の名前が刻まれており、そのうち八組の夫妻の下に二行書きの小文字で唯那（＝維那）と書き込まれている。例えば「△△△妻〇〇〇唯那」の場合、この唯那は夫である△△△に付けられたのではなく、妻の〇〇〇の肩書きと見るべきである。その証拠として、冒頭に「傅雙虎妻張勝男唯那」とあり、この唯那は祈願文にある発願主張勝男に最もふさわしい。また、唯那が夫たちの肩書きならば△△△の前に記せばよいことであって、他の邑義の事例では全てそうなっている。この時代、いかに女性が主役といっても妻の下に夫の名を刻むことは論外だったのであろう。ともあれ、この地に嫁いだ女性八人が集団造像供養の世話役「唯那」としてその役割を果たしたことが読み取れよう。

碑陰の名前を概観すると、まず官位や爵位を有する者は皆無で、また胡族出身を思わせる人物もいない。すべて漢族とみなしてよい。男性は全部で六十四人、女性は全部で六十二人、全体で百二十六人となる。その中で傅氏が抜きんでて多く、男性六十四人中、半分以上の三十四人が傅氏である。

ここで先に確認しておくことがある。祈願文にある張勝男が率いた「百六十余人」のうちに、彼女たちの夫は含まれるのであろうか。碑の左側に刻まれた供養者は多く見ても三十六人（うち八人は碑陰人名と重複）であり、未見の右側（調査で探った感じでは刻字は極少）もその程度とすると、碑陰の夫たちを含めないと到底百六十余人には達しない。従って、碑陰に刻まれた夫君たち男性も、この造像事業に参加した供養者とみなしてよいと判断する。碑陰に単独で記された人物（傅祖と鹿法可）がいるが、この二人は男性と見られることも、この判断が妥当であることの証しとなろう。

男性を姓氏別に多い順から並べてみると次のようになる。

傅（34人）・馬（10）・鹿（6）・張（4）・魏（2）
各1↓　王・閻・賈・曹・田・鄧・李・□

この傾向から、この造像供養の主役である張勝男の嫁いだ傅氏一族が、とりわけ熱心に関わっているとみなしてよいし、大石像碑の造営事業には多額の費用を要することを考慮すると、傅氏の経済力とそれに連携し協力している馬氏、鹿氏、張氏の存在が浮かび上がってくる。因に、四段5行目の鹿法可は「田錢二百」とみえ、彼は石像を安置する土地用に単独で銭二百を布施したことが分かる。(23)

これに対して、女性は次のようになる。（＊は唯那一人に相当）

張(14人＊＊)・鹿(10)・馬(5)・王(5)・傅(4)・瑮(3＊)・閻(2＊)・孔(2＊)・孫(2)・燕(1＊)・賈(1＊)・竇(1＊)

各1↓　韓・崔・曹・段・褚・趙・陳・程・田・鄧・牟・孟

女性は張氏が最も多く、次に鹿氏が続く。男女を比較して見ると、男性が十二種の姓を数えるのに対して女性は二十四種で、女性の姓のばらつきが顕著である。これは造像供養が行われたこの地、臨淄に、他所から嫁いできた夫人たちが参加しているからだと言えよう。もう一つは、唯那という世話役の肩書きがすべて夫人たちであることから、夫人同志の呼びかけも多様な姓の女性の参画につながったと思われる。

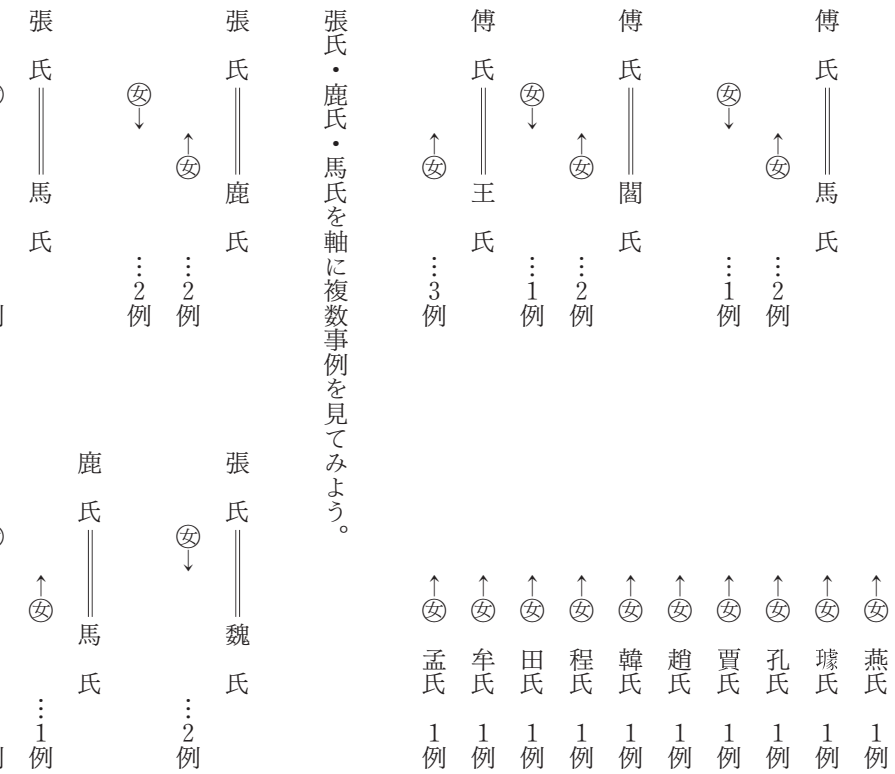
ここで造像供養事業に当って、どのような経緯があったかをみるため、参加者の姻戚関係を整理しよう。分かりやすくする為に、本文末に、姻戚関係図を図示する。線に沿って示した数字は、碑陰の供養者の夫婦関係から割り出した婚姻の件数である。この図を解析すると、この造像供養事業が完璧に傅氏と張氏を軸に行われたことが判然としてくる。

まず、傅氏と通婚関係にある氏族を見てみよう。

傅　氏═══張　氏
　　↑㊛　…8例

傅　氏═══鹿　氏
　　↑㊛　…5例
㊛↓　…2例

傅　氏═══（その他）
　　↑㊛　孫氏　1例
　　↑㊛　褚氏　1例



次に、張氏・鹿氏・馬氏を軸に複数事例を見てみよう。

以上、この大石像碑造営に参与した人々の姻戚関係から、いわゆる臨淄の有力者と思われる張氏・傅氏・鹿氏・馬氏を軸とするネットワークが浮かび上がってきた。ただし、唯那の肩書きを有する婦人は、この有力一族とは合致しない。唯那を引き受けた女性は、発願主の張勝男の他に、もう一人の張氏（傅聡妻）、その他は燕外姬（傅榮仁妻）、璩姬（傅定周妻）、孔姬（傅楼妻）、閻椀香（傅強妻）、賈瓮（傅端妻）、そして寶法生（馬助妻）の八人である。実にそのうち七人が傅家に嫁いだ夫人たちで、しかもさほど有力な或は由緒ある家格の出とは思われない[24]。これは如何なる事情によるものであろうか。それと共に、張勝男という女性が何故に発願主になりえたのであろうか。

祈願文には「青州齊郡臨淄縣清信士女張勝男」とあり、また出土地が山東省臨淄鎮という事実は、この造像碑の制作地が当の臨淄であることを示している。それは即ち、張勝男の嫁ぎ先の傅雙虎の居住地が臨淄であり、また供養者として多くの傅氏が名を連ねていることから、参加した傅氏一族の多くも臨淄に居住していたとみてよい。ところで造像碑の供養者に官位・爵位を有する者がいないことは既述したが、婚姻関係のネットワークを結成している張氏・傅氏は、臨淄地方ではどれほどの有力者なのであろうか。

山東半島の有力氏族と言えば、まず瑯耶の王氏や諸葛氏、泰山の羊氏が想起されるが、西晋末の動乱以降、五胡十六国の興亡などで、旧来の名族はその一部或は大部分が江南に避難する一方、本貫地にとどまった郡県の大姓・大族の多くは南北朝時代には衰滅した。例えば、青州齊郡（臨淄）についてみると、漢～西晋では姓氏、主父氏、鄭氏、劉氏などが文献に見えるが[25]、4～5世紀には在地豪右としての姿は見えなくなり、代わって河北の人士が宗族を率いて断続的に黄河以南に移住し、山東省一帯は複雑な住民構成になった。特に青斉地方には亡命政権の南燕が広固（青州）を都としたこともあって、周辺に多くの移住民が旧郷ごとに集住した。南燕を滅した劉宋王朝はその青州に移住民の為の僑州として冀州を置くほか、出身地ごとに僑郡や僑県を設置した。北魏はこの地を奪うと、その冀州を斉州に改めたが、青斉地方の張氏や傅氏もそうした移住民の一族だった可能性が極めて高い。

まず臨淄の張氏をみてみよう。張氏については、張讜（？～四七四）という人物がいる[26]。張讜の父の張華は、後燕崩壊時（三九八年）に南に渡り南燕に仕えて左僕射を勤めたことから、移住先の僑住地は広固（青州）周辺だったと思われる。張華には十人の子がいて、うち三人は南燕滅亡後に劉宋に仕え、のち北魏に帰降している。なかでも張讜は、劉宋の泰山太守～青冀二州輔国府長史～帯魏郡太守～東徐州刺史などを歴任したが、北魏献文帝の天安元年（四六六）に魏将の尉元に帰順して、上客の厚遇を受け、やがて北魏に仕えて東徐州刺史に除せられ、また爵位

「平陸侯」を賜与された。張讜はその人柄を青斉の人士から信頼され、讜の疏族末流までもみな尊敬されるようになった、という。讜は北魏延興四年（四七四）に没するが、この頃には南渡した清河の張氏は青斉地方において高い評価を得ていたことが判る。ただ、長男の張敬伯は父の亡骸を冀州清河の旧墓に埋葬することに固執し、許可を得るまで五六年かかっている。このことは、張讜一族にとって僑住地は仮の居住地であって、あくまで本拠地は冀州清河郡、という意識が強く残っていたことが窺われる。

南渡した清河張氏にはもう一人注目すべき人物がいる。斉郡臨淄人、張烈（字、徽仙。四六二～五三八）である。[27] 張烈も清河東武城に本貫を有する張氏で、烈の高祖（五世祖）張悌は前燕の尚書右僕射、曾祖父の張恂は後燕の散騎常侍を勤めたが、後燕の崩壊時に慕容徳に従って南渡し、やがて斉郡臨淄に僑居した。南燕が四一〇年に滅亡して以降、劉宋王朝からは採用されず、一族は半世紀以上もの間窮乏生活を余儀なくされた。この間、烈は士大夫としての学問修得に励み、崔徽父・房徽叔と並んで青州の「三徽」と称された。[28] やがて、張烈は北魏孝文帝の時代に推挙され、帝に認められて名「烈」を賜った。また洛陽遷都後は軍事の才も発揮して、宣武帝の初めに「清河県開国子」に封じられ、邑二百戸の封土を賜った。この頃から臨淄の張氏一族は僑住地での地歩を盤石にしたと思われる。その後、烈は老母を看るため官職を離れること十余年、この間に二度青州一帯に飢饉が広がり（延昌二年六月、翌三年四月）、官民共に大恐慌をきたすが、張烈は粥をつくって飢民に賑恤し、多くの命を救い、郷里の民に称えられたことが記録されている。孝明帝の代には実権を握った元叉に阿附して給事黄門侍郎や光禄大夫を歴任、また出ては瀛州刺史に赴任した。そして任期を終えた孝昌三年ころ、老年をもって郷里（臨淄）に還り、兄弟同居して親族に慕われ、十年ばかりの後、東魏の元象元年（五三八）に没した。

さて、先述したように、張勝男等造像碑にみえる斉郡臨淄の張氏は、一定程度以上の財力を持つ有力者と見なされるが、当時の臨淄では清河東武城の張氏以外で有力な張氏は見出せないので、張勝男は上記の張讜や張烈に直接関係するか、或はその疏族であったと思われる。また張勝男は造像碑に「青州斉郡臨淄」の人と明示しているので、『魏書』の記事との整合性を考慮すると、張讜ではなく、張烈の一族、或はその疏族の可能性が高い。『魏書』によって張烈の生活ぶりを見てみよう。

① 張烈の家産は膨大で、僮客などの使用人を多数かかえ、相当な財力を有していた。

② 兄弟同居をつづけていて、弟の張僧皓もしきりに産業を営んで巨万の資産を蓄え、北魏朝廷からの仕官の誘いを三回断わり、世間から

「徴君」と評された。

③　飢饉のときには自分の貯蔵穀物を提供して飢民に賑恤しており、郷里の民を大事に思う気持ちを有していた。

④　張烈は子孫のために「家誡」千余言を作り、朝廷に贈官を求めないこと、またこの「家誡」を石に刻んで碑碣として残すことを遺言し、子の張質はその指示を遵守した。

⑤　烈の兄弟はみな倹約に努め、自分たち男性の車馬や衣服は粗末だったが、夫人や婢妾たちの方がむしろ良質な着物を着ていた。

以上、張烈の処世観や人格を垣間見たが、これらと張勝男との直接の関係を抽出することは難しい。ただ、一族に一定程度の資産があること、女性のおしゃれに寛容であること、貧しい民に賑恤していること、一族のために没後に碑碣を造る事業を行っていること等から、活動的女性の張勝男が張烈一族か或はその疏族である可能性は高いと考える。

次に、傅氏を見てみよう。漢代以来の名門で著名な一族に北地郡泥陽県の傅氏があるが[29]、山東の傅氏とはほとんど関係がない。一方、河北で四世紀から清河の傅氏が台頭し、五世紀には清河の傅永（四三四～五一六）と傅竪眼（四六一～五二七）が現われ、共に『魏書』巻七十及び『北史』巻四十五に列伝が立てられている[30]。列伝では、傅永は清河人、傅竪眼は本清河人と記すが、二人とも本貫は冀州の清河郡で、僑住地は山東の東清河郡にあった[31]。

傅竪眼については近年、淄博市でその墓誌が出土している[32]。その墓誌と『魏書』によれば、傅竪眼は祖父傅融のとき黄河を渡って斉州の盤陽に移り[33]、そこに居を構えて、郷閭の人々に尊重されたという。伯父や父たちは劉宋に仕えたが政争等で不遇の死を遂げたこともあり、傅竪眼は献文帝の天安元年（四六六）、薛安都が北魏に降るに従って入魏した。やがて北魏鎮南将軍の王粛に見いだされて幕下の参軍となり、太和末年には統軍として王粛に従って征伐に当り東奔西走した。その後、宣武帝～孝明帝の代には、梁州～南兗州～益州～岐州～梁州の刺史を歴任し、北魏の西南部国境地帯の少数民族を綏撫することに貢献した。孝昌三年（五二七）任地の梁州で六十七才で病没した。傅竪眼墓誌の左側には、以下のような刻字がある。（校点筆者）

祖諱融。州主簿・治中別駕　　夫人清河崔氏
父諱靈越。□軍将軍・青兗二州刺史　　夫人清河張氏
夫人清河崔氏　息敬和。征東将軍・益州刺史・□強縣開國子　　妻滎陽鄭氏
息敬仲。平東将軍・太中大夫　　妻清河房氏

これによれば、傅竪眼自身も祖父も清河崔氏を娶っており、父の傅靈越は清河張氏を、二人の息子は滎陽鄭氏と清河房氏を娶っている。鄭氏を除くと、実に青斉地方に僑居する清河の望族がみな揃っている。即ちこの墓誌から、東清河の傅竪眼の家系は、一流名族清河崔氏や滎陽鄭氏と、また次の家格の清河房氏や清河張氏と通婚していて、僑居する東清河郡において、望族の姻戚ネットワークに加わっていた、と言えよう(34)。

ところで、張勝男等造像碑にみえる臨淄傅氏と傅竪眼の属する東清河傅氏との関係であるが、造像碑の銘には傅氏と崔氏の通婚関係は一つも見られない。これは臨淄の傅氏は、傅竪眼の傅氏とは疎遠で、東清河傅氏の疎族であった可能性が高い。四世紀以降、清河の望族であった崔氏、張氏、傅氏がその宗族と共に青斉地方に移住した際に、傅融（竪眼の祖父）らは盤陽に僑居し、宗族の一部は臨淄など青斉地方に散住したのではないか。やがて傅竪眼が出世すると東清河傅氏が台頭して本宗を継承することとなったと思われる。

ところで、張勝男等造像碑の供養者の一人に傅堅眼という人物がいるが（一段、6行目）、碑の「堅」と墓誌及び『北史』の「竪」は別字であること、官職の肩書きのないこと、妻が異なること、この時期傅竪眼は西南辺境地の梁州に赴任中であることから、二人は全く別人である。但し、当時著名人だった傅竪眼に因んでの命名と思われることから、造像碑の臨淄傅氏が傅竪眼と遠い姻戚関係にあった可能性がより高まると思われる。

次に鹿氏を見てみよう。鹿氏は、済陰郡乘氏人（山東省北西部）の鹿氏が有名である。『魏書』巻八十八、良吏伝には鹿生（四三二頃～五〇五頃）が献文帝の時に北魏初代の済南太守となって治績をあげたこと、巻七十にはその息子の鹿悆が北魏末期に孝荘帝の御史中尉となり、その後も清廉さを評価されて兼尚書左僕射から衛将軍、右光禄大夫を歴任したことが記されている。しかし、張勝男等造像碑の鹿氏との関係では、出土地と済陰郡乘氏県との距離は約300㎞も離れており、乘氏県の鹿氏と臨淄の鹿氏を直接結びつけるには躊躇せざるをえない。

ただ、山東省益都（北魏の青州府治）出土と伝えられる孝昌二年三月（五二六）銘の「鹿登等法義造像記」[35]がある。これは三人の比丘に指導された男性中心の法義による造像で、邑義や法義集団における肩書きの維那主（鹿氏二人）、維那（鹿氏二人）のほか一般の供養者も鹿登や鹿同など大半が鹿氏で、鹿氏一族を軸にした造像事業である。また在家仏教信徒を表わす「清信士」の肩書きを持つ者が、十数人見られるものの、供養者に官位や爵位を有する者は見当たらない。祈願の中に「仰為國家、下為郡上…」とあり、王朝を意識していることが伺われる。また、青州斉郡臨淄の記事を有する北魏孝昌三年八月銘「尼曇密等邑義六十人造像記」[36]にも鹿氏が七人見える。

上記によって、臨淄の鹿氏は当時の造像供養という奉仏事業に積極的に参加している一族であることが見えてきた。彼らが済陰郡乗氏の鹿氏の宗族かどうかは不明だが、珍しい姓であるだけにその疎族である可能性は充分あると思われ、少なくとも青斉地方での有力一族鹿氏の存在を認めることはできよう。

以上、臨淄で制作された張勝男等造像碑にかかわった張氏、傅氏、鹿氏を見てきた。張氏は本貫地を清河東武城にもつ南渡した張烈の疎族、傅氏も清河傅氏で南渡した傅竪眼の疎族、鹿氏は青斉地方での望族で済陰乗氏県鹿氏の疎族である可能性が見えてきた。馬氏の由緒については不詳であるが、上記三氏と姻戚関係にあることから青斉の有力一族に並ぶ存在だったことが想定される。

一方、北魏孝明帝時代の青斉地方における一流名族の姻戚ネットワークとしては、清河崔氏、清河房氏、清河張氏そして滎陽鄭氏の結びつきがあった。そして傅竪眼墓誌から、清河傅氏もそのネットワークに連なっていたことが明らかとなった。南渡後の彼らの主たる僑住地は崔氏が斉州東清河の鄒県、房氏が東清河の繹幕県、傅氏が東清河の貝丘県であり、東清河郡内の三姓は地理的に極めて近いのに対し、張氏は青州斉郡の臨淄県であって、臨淄の張氏だけが直線でおよそ40㎞離れていた。その上で張勝男等造像碑を見ると、臨淄で制作された造像碑に崔氏・房氏が加わっていない事情は身分や家格の違いに加え、距離が離れているという地理的条件にもよると思われる。また同様に、傅氏の本宗の参加も困難だったと想定される。

以上の検討によって、張勝男等造像碑は、名族の清河張氏と清河傅氏の疎族を軸に、臨淄地方で形成された在地有力者による姻戚関係を利用して、或は彼らの結束を誇示する意図を含んで行われた造像事業という性格が見えてきた。しかし、その事業を女性の張勝男が他の七人の婦人（唯那）の協力をえて主導するに至った背景については未解決の課題として残された。両側の供養者と共に別途検討したい。

六、劉愛女等法義兄弟姉妹造像記【史料4】北魏、正光四年（五二三）

この造像記は、現在の済南市市街地の南、千佛山の南東に位置する黄石崖に彫られている。近年、日中の研究者によって丁寧な調査が行われ、この造像記が現存することが確認された[37]。それによると、この造像記は摩崖上部の第九龕（如来坐像四軀）の下に刻まれている。

銘文は「北魏正光四年七月廿九日、造像供養をするために集まった法義兄弟姉妹が石窟像廿四軀の奉造を行い、それがここに完成したので、その名前を歴記する」として、次に供養者の名を連ねて刻んでいる。その冒頭に「釋伏宋同正鋤」とあり、次に女性供養者の名が二十七人刻まれ、うち四人は維那主の肩書きを持っている。法義兄弟姉妹とあるから「釋伏宋同正鋤」は男性の賛助者かもしれない[38]。

供養者二十七人を姓別に整理すると次のごとくで、また維那主は、劉愛女、沐瓮姫、張牛女、呼延摩香の四人である。

劉（6人）・張（4）・王（3）・呼延（2）・賈（2）・趙（2）・沐（1）・胡（1）・孫（1）・紀（1）・徐（1）・白（1）・石（1）・不明（1）

この造像記でまず注目すべき点は、山東地方における石窟や摩崖では最も早い黄石崖の造像記で、その黄石崖でも最も古い紀年銘を有している点である。そして、山東地方の邑義造像の事例としても四番目に古く、その後の「成買寺主道充等法義百人造像記」（正光五年八月）以下に続く山東法義造像群に属す作例である[39]。

次に着目すべきは、女性たちがどのような繋がりを背景に集まったのかという点であるが、姓のばらつきが多いことから、多くは既婚の婦人たちであろう。参加者が多く、且つ維那主を出している劉氏と張氏が法義集団の中核かと思われるが、彼女たちの嫁ぎ先が不明のため、張勝男等造像記のような分析は難しい。女性だけで邑義を作って運営していくことの困難さを思うと、やはり「釋伏宋同正鋤」と表記された男性の信徒（僧？）の指導や援助があったと見る方が自然ではないかと思う。

因みに、供養者名の中ほどに張勝男という女性名が見えるが、これは臨淄の張勝男とは同姓同名の別人と思われる。臨淄と済南の距離が直線で三百キロ余りあって遠すぎるのと、他の供養者に張勝男等造像との共通性が見られないからである。

しかし、見方を変えれば、山東の臨淄と済南という遠く離れた両地域で、ほぼ時を同じくして女性主導の集団造像供養が出現したことになり、それはとりもなおさずそれらを生み出した社会的・宗教的・政治的環境がいかにして醸成されたかという課題となろう。また一方では、着々と

力量を蓄えつつ、仏教を機縁として自己表現に意欲をみせる女性の欝勃としたエネルギーを感じ取ることも可能と考える。その後の史料とも合わせ考えると、それがなぜ山東地方なのかという興味ともつながっていく。

おわりに

以上、北魏における女性の集団造像をいくつか取り上げて若干の考察を加えてきたが、奉仏供養のための造像事業という社会的行為において、女性が主体的に参加する傾向が徐々に進展していくさまが明らかになってきた。またその過程で当該時代の女性のおかれた家族・宗族関係や社会的環境のありようもいくばくか見えてきた。東西魏以降、女性主導の造像関係資料はさらに豊富になっていく。この点から、中国古代中世における女性の自己表出の活性化について、仏教信仰は確実にその契機を提供したと考えられる。

ところで、南北朝期の女性が社会的な自己表出を活性化させる傾向にあったことについては、すでに当時の知識人においても認識されていたようである。梁～後梁～西魏～北齊～北周～隋の諸王朝を経歴した顔之推（五三一～五九一）は、子孫に残した訓示『顔氏家訓』の治家編において、次のように述べている。[40]

> 江南の婦女は、ほとんど外に出て交際することなどしないけれども、北齊の都の鄴では、家庭は婦人が維持していて、曲直をはっきりさせようと訴訟も起こすし、息子の仕官や亭主の出世のために勢家の門を叩いて頼みごとをしたり、或は頼まれたり…。そのため彼女らの乗り物が街路にあふれ、着飾った艶姿が堂々とお役所に出入りするありさまである。かかる風潮はかの恒代の遺風というものなのか！
>
> また、江南の士族は外面の体裁ばかり気にして乗り物・衣服は上物をばっちりしつらえ、そのじつ家内は火の車という例が少なくない。これに対し、河北の社会では家事は女性が取り仕切っていて実質を重んじ、婦人用の美服や貴金属はしっかり保持する一方、外見は気にしないため、殿方はやせ馬やよれよれの下男で我慢するありさまである。

この中で顔之推は、このような風俗は「恒代之遺風乎！」と慨嘆している。恒代とは北魏の平城時代をさすので、恒代の遺風とは少数民族である《鮮卑の風俗の名残り》とみている。北朝女性の元気さや実質重視について顔之推の感興は興味深いが、その淵源を鮮卑の風俗のみに求めるのは、やや妥当性を欠くように思う。

騎馬遊牧民の社会においては、水汲み、炊飯、子供の世話から家畜のえさやりまで家事全般を女性が担った。これに対し、成人男子は部族の運営や他部族との交流（戦闘や紛争解決、客人接待など）に従事し、日課は走馬や騎射など武術訓練が主だったとみられる。女性の日常生活は休息のない苦労の連続で、家庭内での女権はあっても、その社会的な地位や扱いは決して高いものではなかった。それが変化するのは、鮮卑族が華北に進出して政権を立て一定領域の支配者になってからである。それ以降、鮮卑族の上層部は恒常的に富の分配にあずかるようになり、家事全般に関与する女性たちにも余裕が生じてきた。特に北魏では、文明太后や霊太后が権力者として君臨し、女性を通じての人脈や情報が行きかい女性たちも社会的交際の経験ができるようになった。それに加えて仏教信仰が女性の精神的支えになったと同時に、寺院参詣や尼僧を介した情報交換など交際の場も広がったことなどが挙げられよう。この女性のあり方が漢族上層の女性にも波及した、と考える。その点では、北朝における女性の活性化は、華北における人間社会の変化の胎動を象徴しているといえるであろう。

南北朝期女性の活性化を仏教信仰にしぼって考察すると、仏教の何が女性の考え方・生き方に変化をもたらしたのであろうか。卑見の一端を述べておくと、中国古代中世の女性たちにとって、仏教信仰がなにがしか心の支えになったことは確かである。軽重さまざまな思いをもって出家した女性たちの中には、自らが属していた家族や世間を離れて始めて社会を客観的に見ることができ、女の身に生まれて初めて完全なる自由の道が開けたと感じた尼僧も少なくなかった。また在家にあっても、造像供養にみえるように日常生活を営みながら功徳を積むことに思いをいたす女性たち、彼女たちがたとえ強烈に意識し自覚するほどではなかったとしても、仏に祈るおのれを自信した。これを後世の我々として、女性たちの「主体性の獲得経験」という表現をするのは傲慢に過ぎるであろうか。

ともあれ、仏に祈ることは徐々にではあるが当該時代の女性たちに元気をもたらした。その痕跡が時を経たいま歴史資料として造像銘に残されたのである。

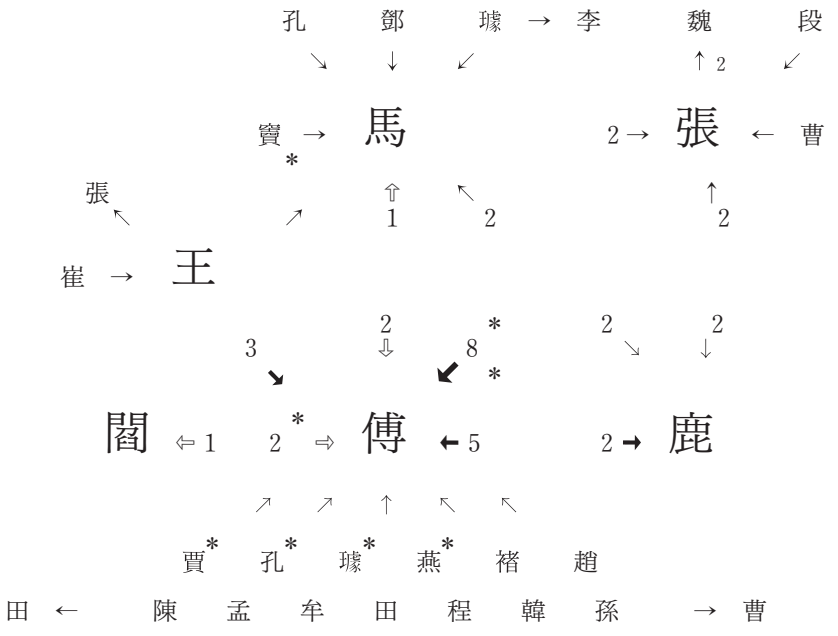
5世紀　青州臨淄県における

傅・張・鹿・馬氏　姻戚関係図

（北魏正光三年、清信女張勝男等造像記碑陰）

→ ＝ 出嫁事例数1

＊ ＝ 唯那1



註

（1）松原三郎『中国仏教彫刻史論』（以下、松原史論と略称）図23・24

（2）東洋文庫、梅原考古資料（拓本。ワシントン、フリアギャラリー所蔵）

（3）大村西崖『支那美術史彫塑篇』一七九頁。羅振玉拓本

（4）大村西崖『支那美術史彫塑篇』一八五頁。『魯迅輯校石刻手稿』造像（以下、魯迅輯校と略称）一三頁。顔娟英『北魏紀年佛教石刻拓本目録』No.5

（5）佐藤智水「中国における初期の「邑義」について（中）―銘文編1―」（『仏教文化研究所紀要』第四十六号、二〇〇七）

（6）石松日奈子『北魏仏教造像史の研究』第五章（二）復仏と雲岡石窟（ブリュッケ、二〇〇五）

（7）佐藤智水「山西省塔寺石窟北壁の北魏造像と銘文」（『龍谷史壇』一三〇号、二〇一〇）

（8）個別の女性名が書かれたもので、造像銘より古い遺物に墓券2例がある。一件は後漢中平五年（188）洛陽大女房桃枝買地券。もう一件は、劉宋元嘉九年（432）王仏女買地券である。資料は、冨谷至「黄泉の国の土地売買」（大阪大学教養部研究集録［人文・社会科学］第三十六輯、一九八七）、及び端方『陶齋臧石記』巻十三、参照。

（9）王黄羅等碑の中で確実に女性と思われる九十人の名前から、よく使われている文字と事例数をあげておく。

阿19・女14・英7・姬6・妙6・姜6・朱5・男5・好4・娥4・愛3・陵3・狃3・尔3・雙3・堂3・姿2・要2・黄2・敬2・妍2・歸2・農2・賜2・羅2・香2・金2・銀2・玉2・王2

（10）維那とは、もとは梵語で「僧衆の雑事を司る人」を意味する訳語。中国では寺院の三綱の一つに使われたが、北魏では国家の宗教統制機関である昭玄曹の長官沙門統の次官名に都維那が採用され、地方においても州や鎮の沙門統の次官として僧尼の統制に当った。彼らは基本的に出家者であったが、これとは別に邑義など民間の仏教信仰集団の世話役としても俗人の維那が登場した。造像記では、音通で「唯那」や「惟那」などとも刻されている。

（11）佐藤智水「北魏太和末年の大型石仏像」（『龍谷大学論集』四六六号、二〇〇五）

（12）この「□□□□□□子」について、「龍門録」のように「比丘尼蘇□子」と読むにしても、その上の二文字□□が宙に浮く。この最初の□□について何かを当てるとすれば、日付けの己酉か、或は唯那であろう。その場合は唯那の可能性が高い。僧や尼に本の俗姓を付して記す例はこの時代間々見られる。

（13）尹愛姜等造像記にみえる女性の名前で、使われている文字を集計しておく。
姜4、容3、醜3、妙2、好2、姿2、女1、愛1、雙1、陵1、
娥1、足1、趙1、郷1、桃1、豊1
王黄羅等造像碑に見える女性名の傾向と共通する点が多い。

（14）『魏書』高祖本紀七下、太和十七年冬十月戊寅朔に「詔司空穆亮與尚書李沖・將作大匠董爵、經始洛京。」、十八年二月甲辰に「詔天下、喩以遷都之意。」の記事がある。この点の指摘は、すでに温玉成「龍門古陽洞研究」（原載：『中原文物』特刊、一九八五。龍門石窟研究所編『龍門石窟研究論文選』再録。上海人民美術出版社、一九九三）にみえる。また、後宮や百官たちの移住完了は『魏書』同条の太和十九年に「九月庚午、六宮及文武、盡遷洛陽。」とみえる。

（15）「古陽洞」によれば、「廣川王太妃侯氏為亡夫賀蘭汗造像」D87龕は、高96cm、幅63cm、深8cm：本尊交脚菩薩像通高55cm、肩幅17cm。「廣川王太妃侯氏為己身及孫息造像」D99龕は、高136cm、幅83cm、深14cm：本尊交脚菩薩像残高70cm。王神秀造像龕D101は、高25cm、幅18cm、深4cm、本尊は三尊合手坐仏。平乾虎造像龕D97は、高33cm、幅21cm、深3cm、本尊は三尊合手坐仏。

（16）「古陽洞」によれば、王神秀、平乾虎のほか、高さ25cm以下の小規模な龕で銘記を有するのは、D96龕（「國典衛」）、D98龕（「比丘惠遷」）、D100（「太妃」）で、廣川王太妃侯氏との関わりを想起させるものである。

（17）「元煥墓誌」（北魏孝昌元年十一月八日葬。趙超『漢魏南北朝墓誌彙編』）によれば、廣川王太妃侯氏の父は「上谷の侯石抜、平南将軍・洛州刺史」とある。侯氏は漢族にも胡族にも使われた姓で、胡漢の違いは不明瞭。ただ、石抜という名前からすると非漢族のように思われる。

（18）尹氏は天水の尹氏が当時最も有名で、次に河間の尹氏である。『魏書』には、明元帝の後宮で永昌王健の生母尹夫人や沛郡公元禎の第五子瑞の生母尹氏がみえ、北魏王室と尹氏との関係が垣間見られるが、古陽洞の尹氏との直接的関係は史料が少なく現時点では不明である。

（19）この龕＝「古陽洞」D92（銘記No.2282。龕高106cm、幅72cm、深8cm。本尊は交脚菩薩像で通高59cm、肩幅14cm）は造像碑形を持つ大型の龕で、尹愛姜等造像の真下にあり、廣川王家関係区域の中では二番目の規模を有する。造像記の内容は題額に「邑像」とみえるものの、祈願部分は摩滅が激しい。「古陽洞」は録文No.2282とNo.2300を別物とみているが、同一の可能性が高い。「龍門録」では景明元年とし、「古陽洞」では景明四年十月としており、共に邑師惠□の名が見える。この尹愛姜等造像の直下の邑義造像は、恐らくは廣川王家と縁のある男性を中心とした団体造像で、尹愛姜等との繋がりもあったことが想定される。このほか廣川王家関係区域には、「古陽洞」D86龕（高69cm、幅50cm、深6cm。本尊通高45cm、肩幅14cm）と同D88龕（高78cm、幅65cm、深5cm。本尊交脚菩薩像通高47cm、肩幅11cm。脇侍菩薩像未完工）という中型の龕があるが、共に造像記のスペースに刻字の跡はない。

（20）銘記の移録については、碑陰の文字は市川氏と筆者、左側については長谷川氏と筆者が協力して行った。写真は主として長谷川氏が担当した。本稿の移録清書について、写真との校合など細かな修正は筆者の責任で行った。両氏に深く謝意を表したい。

（21）本像に類似した造像碑として、臨淄区近くの博興県博物館所蔵の王世和等造像碑（正光六年六月造）がある。残高240cm、幅80cm、厚70cmと規模もほぼ同等である。

（22）南北朝時代の女性には〝男〟の付く名前は珍しくなく、逆に男性にはほとんど見られない。例として、王黄羅等造像碑には阿男が三人、済南市黄石崖の劉愛女造像記【史料4】には勝男が一人、同じ黄石崖の元氏法義（孝昌二年）にも迎男や男生という女性名が刻まれている。

（23）鹿法可が提供した「田錢二百」の意味は、「（造像碑を安置する）田と銭二百」なのか「（造像碑を安置する土地の）田を入手するための銭二百」なのか判断が難しいが、この場合「田」の広さが示されていないので、後者の理解がいいかと思う。造像碑にかかる費用をどの程度負担したかについては事例が少ないが、近しい作例としては神亀二年九月に齊州東清河郡の崔懃が法

義二十五人を率いて造った石像銘に「法義兄弟廿五人各錢一百裁佛金色」とあり、一人百銭を布施して仏像を金色に荘厳する費用に充てている。石像自体は像主崔懃が銭九千を供しており、また一族の崔鴻なども協賛しているので、この地方で2mを越える規模の石像を造るには、少なくとも一万銭以上を要したことが推測される。崔懃等造像は李静杰編『石佛選粋』図64。

(24) かなり有力な家系の可能性があるとすれば、傅端の妻賈瓮は賈思伯・賈思同兄弟を輩出した斉郡益都の望族かもしれない。『魏書』傅永伝には、永の妻賈氏がみえ、傅永が都の平城に徙された後も本郷（東清河郡貝丘県）に留まった、という。

(25) 姓氏については『漢書』巻九一に「貲五千萬」とあり、主父氏については『史記』巻一一二に「賓客以千数」とあり、鄭氏については『後漢書』巻三三鄭弘伝注引の謝承『後漢書』に「（鄭弘）其曾祖父本齊國臨淄人…武帝時徙強宗大姓」と見える。また劉氏については『北堂書鈔』巻三四七引『典略』に「徙六郡大族」とある。

(26) 『魏書』巻六十一、張讜伝。『北史』巻四十五、張讜伝。

(27) 『魏書』巻七十六、張烈伝。『北史』巻四十五、張烈伝。

(28) 「三徽」と称された三人は、共に本貫が冀州清河郡東武城で、青斉地方へ移住した名族の後裔という共通点があり、谷川道雄氏によれば、この頃すでに清河を本貫とする崔氏・張氏・房氏、さらに平原を本貫とする劉氏が加わって、僑住地において幾重にも望族同志の婚姻ネットワークがあった、とされる。この点については、その後出土した墓誌等によっても証明されている。谷川道雄「六朝時代における都市と農村の対立的関係について―山東貴族の居住地問題からの接近―」（唐代史研究会編『中国の都市と農村』汲古書院、一九九二年、七三頁）。青斉地方の僑住民については、唐長孺「北魏的青齊土民」（『魏晋南北朝史論拾遺』中華書局、一九八三年）参照。

(29) 三世紀の中国で傅氏といえば、北地郡泥陽県（陝西省西安の北、耀県付近）の傅氏が最も有名で、漢代の漢陽太守傅燮、曹魏の扶風太守傅幹、西晋では太僕から司隷校尉となった傅玄（二一七～二七八）、尚書左丞・御史中丞・司隷校尉を歴任した傅咸（二三九～二九四）等を輩出し、その子孫は東晋以降も江南の諸王朝で遇された。清河の傅氏との交流は全く見えない。

(30) 傅永と傅竪眼は同族であったが、遠戚だったと思われる。傅永は、幼児期に叔父の傅洪仲に従って青州から入魏したが、のちまた南奔した。武芸や騎馬に優れていたが、学識がないことを叔父に詰られ、発憤して経史を渉猟し文才も身につけた、といわれる。皇興三年、北魏が劉宋から青斉地方を奪ったとき、崔道固と共に北魏に降伏し、平斉民とされ、十数年の窮乏生活を余儀なくされた。やがて、力量を認められて官途につき出世していくが、没後に封地であり一族の住む東清河郡に埋葬された。その時、旧郷の清河に葬られていた父母も移されて傅永と同所に改葬されたという。『魏書』のこの記事から、傅永の新郷里（僑住地）が山東の東清河郡貝丘県だったことが分かる。僑県としての貝丘県は、現在の淄博市淄川区南部付近と思われる。

(31) 傅竪眼は『魏書』では一貫して「傅竪眼」と記し、『北史』では「傅竪眼」と記す。「竪」は「豎」の俗字で、共にジュと読み、「竪」とは別字である。新出の墓誌は「傅竪眼」と記しているので、本稿では「傅竪眼」と表記する。

(32) 張光明「山東淄博市発現北魏傅竪眼墓誌」（『考古』一九八七年第二期）。報告によれば、墓誌の出土地は淄博市淄川区二里郷石門村。墳墓はもと高さ八mあったが、現在は削られて墓の形成や埋葬品などは不詳という。

(33) 南渡の時期は四四〇～五〇年頃で、僑住地の磐陽（＝盤陽）は青州の要所にあり、盤陽城は北魏と宋の争奪戦の際には攻防の焦点となった。北魏が青斉地方を獲得すると、盤陽城には東清河郡が置かれた。現在では淄博市淄川区に位置する。この盤陽から臨淄までは直線にして約40kmの距離にある。

(34) 傅竪眼墓誌の記載に若干の違和感を感じるのは、娶った妻たちの父祖の名が全く記されていないことである。それは夫人たちの父祖がさほど著名ではないということと関わるのか、検討の余地がある。北魏全期を通して、また粛宗・霊太后時代においては特に、傅竪眼は清河傅氏の筆頭に挙げられる人物である。或は、梁州という遠い任地で死亡した傅竪眼を郷里に埋葬するまで七年も経過したことと関係するかもしれない。

(35) 鹿登等造像本体は現在行方不明で、『北京図書館蔵中国石刻拓本匯編』第5冊（21頁）に拓本及び付記「刻於山東益都。拓片高82糎、寛114糎。正書」がある。拓本は摩耗が激しく読み取りは困難を極めるが、『山右石刻叢編』巻一に半分の移録が見える。顔娟英主編『北魏紀年佛教石刻拓本目録』（中

央研究院歴史語言研究所、二〇〇二、台北）№203は部分拓本であるが、その付記には「山東省益都北馬皆庄、吉祥寺出土」と見える。益都は北魏時代の益都県で青州府の所在地。

（36）「尼曇密等邑義六十人造像記」は山東省廣饒市西営郷張談村出土で、現在は青州博物館所蔵。拓本は『北京図書館蔵中国石刻拓本匯編』第五冊（66頁）に「臨淄縣六十人等造像記」としてみえる。移録は『魯迅輯校石刻手稿』造像一五九頁。

（37）張總「山東歴城黄石崖摩崖龕窟調査」（『文物』一九九六年第四期）。岡田健「研究資料―山東歴城黄石崖造像―」（『美術研究』三六六号、一九九七年二月）。岡田氏によれば、共同調査は張總氏・陳聿東氏・岡田健氏の三人によって、一九八四年と一九九五年の二回行われた、という。

（38）この造像記は未解明の課題がいくつか存在する。一つは、銘文に石窟像廿四軀と刻むが、現存では摩崖に四仏を確認できるものの、ここで言う石窟とは何か、残りの廿体をどう数えるのか、不明である。二つに、供養者の題名冒頭の「釋伏宋同正鋤」の意味である。三つに、兄弟姉妹と記しながら供養者はほとんど女性である。兄弟姉妹がそのまま正しいとすれば、「釋伏宋同正鋤」を男性とみなして「仏弟子の宋同正、鋤く」と解するほかない。

（39）山東地方の最初期の邑義造像例は①「崔懃等法義兄弟廿五人造像記」（神亀二年九月十一日）、②「清信女張勝男等造像記」（正光三年正月六日）、③「板當利県令王珍之等造像記」（正光三年正月廿六日）④「劉愛女等法義兄弟姉妹造像記」の順で現われる。佐藤智水「中国における初期の『邑義』について（上）」（『仏教文化研究所紀要』第四十五集、二〇〇六）参照。山東地方の邑義の作例は、法義と自称することが多い。その理由や背景については、別途検討したい。

（40）『顔氏家訓』巻五、治家（出典：『顔氏家訓彙注』中央研究院歴史語言研究所専刊之四十一、台北一九六〇年）

江東婦女、略無交遊。其婚姻之家、或十數年間未相識者、惟以信命贈遺、致殷勤焉。鄰下風俗、專以婦持門戸。爭訟曲直、造請逢迎、車乘以塡街衢、綺羅盈府寺。代子求官、爲夫訴屈、此乃恒代之遺風乎！南間貧素、皆事外飾。車乘衣服、必貴齊整、家人妻子、不免飢寒。河北人事、多由内政、綺羅金翠、不可廢闕。羸馬嶺奴、僅充而已。

このなかで最後の「河北人事、多由内政、綺羅金翠、不可廢闕。羸馬嶺奴、僅充而已。」は、先述した北魏後期の張烈一族の生活ぶりと符合する。

史料

1　王黄羅等百人造像碑　北魏無紀年

一九五七年山西省高平県邢村採集

山西博物院所蔵

銘は背面の下段に刻す。筆者調査 1985・2002

□□□の部分には意図的削除の跡あり

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1				畢妍妤	牢阿銀	李玉堂	
2	都維那□□	畢洛姿	畢阿英	王阿小	崔阿賜	成公愛姜	王・・
3	□□□□□	成公阿好	王妙羅	原法容	張歸堂	令狐狃	
4	維那王黄羅	孫妙陵	郭薛胡	韓妙容	浩容姬	王歸生	畢阿狃

5 維那司徒好　郭富朱　呂雍容　邢阿魯　趙先好　申屠黄
6 維那王阿容　王龍英　崔阿醜　趙女郎　王貴女　李小孤　王愛□
7 維那魚公主　張明暈　郭娥朱　申屠妙　張阿農　王阿敬　窄□徳
8 維那趙賜　司徒樓英　申屠万姫　李女王　司徒醜　陳女尓　郭英女
9 維那孟香嬰　王男容　王苟女　李榮光　王阿因　畢小姫
10 維那畢都狃　司徒愛女　王妙陵　皇甫照姜　畢農朱　□□□
11 維那浩那　張雙胎　張要光　韓金容　窄娥英　杜女賜
12 維那閻農　畢妍姫　邢女姿　孟斉王　王妙陵　邢雙娥
13 申屠敬夫　朱歸香　和阿娥　崔洛繡　浩容朱　浩金堂
14 李傅女　張阿好　窄銀英　陳秀容　王要姫　王真朱
15 薫阿黒　王雙曼　魚女玉　閻清女　郭阿男　侯阿休
16 浩華姜　郭温姫　浩男姜　聊阿男　郭女姜　彭阿男
17 浩苟女　趙定光　秦女尓　王希胎　王思尓　殷容姜

2　尹愛姜等廿一人造像記　北魏　景明三年六月二十三日（五〇二）

所在　河南省洛陽市龍門石窟（古陽洞窟頂）

1 景明三年六月廿三日。□□□□□□□子、唯那
2 尹愛姜、唯那張雙□、□□□、□妙姿、王容、王午
3 娣女　好、楊醜姜、郭容、劉豊、王□、□轉好、王足趙、尹娥
4 容、鄭桃、胡歎郷、尹醜姜、尹醜女、程曇妙、尹顯姿、
5 尹陵姜等廿一人、各為七世父母、所生眷属、亡者生天、
6 生者福徳、□□石弥勒一區。普為終生、咸同此願。

3　清信女張勝男等合邑造像碑　北魏正光三年（五二二）正月六日

山東省出土　筆者調査 2010

【碑陰　上部】

1　夫洪流滔漫非神舟無以流其津大夜重昏非達
2　覺莫能悟其跡是以釋迦如来脩殊功於曠劫
3　之前救妙　果於法雲之後故能絶累塵外道
4　拯群生者也是故千載之下青州齊郡臨淄縣
5　清信士女張勝男率佰六十餘人等弱齡抽簪歸
6　　道真跡識量淵凝慧鑒遐發體道清虛保首世
7　網乃割家珎之分奉為師僧父母兄弟及一切
8　衆生敬造釋迦牟尼石像一區匠極槃舒之巧
9　形加　万代之美造須時珎功貫海自雖未盡
10　表聖　容之妙麗庶招微心之精誠願藉
11　此建　造之功仰資亡者使抜跡清源濯
12　累塵　表託生靈津浪承玄旨現在居
13　家眷属壽命永延身心安隱含識有生
14　咸　同斯福　大魏正光三年歳次壬寅
15　　正月　甲午朔六日己亥

（移録は現状のまま。空白個所は刻字の際に石の痕を避けた所）

【碑陰 下部】（清信女張勝男等）

	①	②	③	④
1	傅雙虎妻張勝男 那唯	傅槃虬妻鹿伯端	馬奉妻璩雲	
2	傅榮仁妻燕外姬 那唯	傅胤妻鹿妙之	李強妻璩敬香	
3	傅小腫妻王買德	傅蕭妻田陸	馬龍苻妻鹿瓮	張化妻鹿匡姜
4	傅笴妻褚華英	馬高之妻傅雙王	□菟涅妻鹿英	傅山妻王禹
5	傅同妻鹿英桃	馬清奴妻張迎男	馬届生妻鄧法妍	鹿法可　田錢二百
6	傅堅眼妻馬延	傅賢妻程照仁	鹿統妻張瑠璃	傅焉奴妻孫思
7	傅定周妻璩姬 那唯	傅　祖		魏盖妻張祖姬
8	傅樓妻孔姬 那唯	傅胡妻趙瑤姜		鹿灰延妻傅妃
9	傅強妻閻椀香 那唯	傅叵棠妻張永資		曹普之妻孫蒲容
10	傅領群妻王孃仁	馬助妻竇法生 那唯	鹿貳興妻馬遺姬	傅道定妻張小姬
11	傅聡妻張□ 那唯	馬念妻鹿金□	傅舜妻張愛姬	張僧林妻段玉勝
12	傅端妻賈瓮 那唯	馬姜仁妻孔因諍	傅僧蘭妻馬勝	傅法隆妻張奥姜
13		馬黒妻張寄香	傅旹妻王含香	張僧始妻鹿照
14	傅懐妻張明勝	鹿建符妻張桂香	張竇奴妻曹瓮	
15	傅曇安妻韓香	傅安和妻孟王	傅恵承妻鹿金英	
16	田景智妻陳要仁	閻苟妻傅文	鄧山母馬雍容	
17	傅法和妻閻恵憐	傅領群妻張璭頭	馬端妻王文諍	
18	鹿汪之妻傅陵	魏普隣妻張同	王僧建妻崔容生	
19	傅建孫妻鹿元姬	傅伯隣妻牟令資	賈元貴妻馬娥	

劉愛女等法義兄弟姉妹造石像記

北魏正光四年（五二三）七月二十九日

所在　山東省済南市黄石崖摩崖

大魏正光四年七月廿九日。
法義兄弟　姉妹等、敬造
石窟像廿四軀。悉以成
就。歴名提記。
　釋伏宋同正鋤。
　維那主劉愛女。
維那主沐瓮姬。　賈篋。
劉法香。王寶姬。劉阿香。
劉阿思。劉勝玉。胡阿嬪。
王犁姜。呼延伏姬。賈阿妃。
劉桃姬。王足。　孫敬嬪。
趙妃姜。張勝男。張漢仁。
紀姜女。張骨子。徐清女。
維那主張牛女。　維那主
呼延摩香。白齊姜。
石桃女。趙義姜。
張道女。

北魏における女性の集団造像

◎＝女性が主導　○＝女性多数参加　△＝男性集団に従属

○太和7年8月30日（483）　邑義信士女五十四人　女性36人　＋尼　1　雲岡石窟　第11洞
石廟形像九十五區諸菩薩　（山西省北）　男性18人？＋邑師4

△大和16年4月8日（492）　白詡・盧恭等　女性33人（母・妻・娘）　筆者調査
造像一區　太谷県塔寺石窟　（山西省中）　集団およそ180人　龍谷史壇130

◎太和末年（496―499）　王黄羅等百余人造像碑　女性90人　山西博物院蔵
（三尊挙手坐仏＋千仏）　（山西省南）　（都維那1＋1・維那9）　高平市邢村将来
その他14

◎景明3年6月23日（502）　尹愛姜等廿一人　女性20（唯那2＋1）　龍門石窟古陽洞
石弥勒一區　龍門石窟古陽洞　（河南省中）　欠損1

△正始元年3月9日（504）　高洛周等七十人（140人）　女性20人　仏教文化研究所紀要46
釈迦石像一區　范陽郡涿県　（河北省北）　男性およびその他120　北京図拓Ⅲ p.76-77

◎正光3年正月6日（522）　清信女張勝男等百六十餘人　碑陰：夫妻61組・母子1組（女性唯那8）　筆者調査
釈迦牟尼石像一區　青州齊郡臨淄県（山東省東北）　（その他、左側面34人）　斉国歴史博物館蔵
（右側：未調査）

△正光3年正月26日（522）　王珍之等　女性23（比丘尼22）　北京図拓Ⅳ p.127
（尊像不明）　光州當利県　（山東省東）　男性4（比丘僧3・県令1・維那2）
その他92

◎正光4年7月29日（523）　劉愛女等法義兄弟姉妹　女性27（維那主4＝劉愛女ら4）　黄石崖摩崖
石窟像廿四軀　済南市黄石崖　（山東省中北）　その他1　北京図拓Ⅳ p.147

△正光6年4月19日（525）　賈智淵妻張寶珠等　女性22（清信女22）　山東博物館蔵
（三尊挙手立仏）　青州市収集　（山東省東北）　男性12（清信士12）　北京図拓Ⅳ p.182
男女不詳7（清信□）

○孝昌2年9月8日	（526）	元氏法義卅五人		
弥勒像一區		済南市黄石崖	（山東省中北）	黄石崖摩崖
				魯迅輯校 p.143
				『中国金石集粋』
◎孝昌3年8月13日	（527）	尼曇密等邑儀六十人		北京図拓Ⅴ p.66
如来石像一區			（山東省）	魯迅輯校 p.159
○孝昌3年9月17日	（527）	義主葛道済等法義九十人		北京図拓Ⅴ p.67
専塔一區			（地域不詳）	
○武泰元年4月8日	（528）	邑主杜和容等七十人		松原史論図203
石像一區			（陝西省南）	『陝西碑石精華』
◎永熙2年5月8日	（533）	僞蒙文姬等合邑子卅一人		北京図拓Ⅴ p.179
石像一區		耀県碑林	（陝西省南）	『貞石之魂』 p.68

女性25（維那2）
男性6（比丘2・都維那4）
その他17

女性78（比丘尼12）
男性30
男女不詳12　欠損25

女性51（義主1）
男性＋その他32（比丘1）
（施地主1・義主1・塔主1・基主1）
男女不詳15　欠損7

女性60（尼0）
（像主1・邑曰2・維那3・化主3）
（治律1・典録2・典坐4・香火4）
（清信女14・邑子16）
男性19（邑師比丘2・比丘1・沙弥1）
（門師2・木花主1・清信士7・討寇将軍1）
男女不詳6　欠損11

女性50
（邑主2・邑謂2・惟那1・邑正2）
（弾官2・香火2・典録2・邑子14）
（邑子清信12）
男性3（比丘1・沙弥1・書人1）
欠損4（惟那1）